



土橋 寛教授近影

土橋 寛教授を送る

南 波 浩

同志社国文のわれわれにとって、偉大な師表であり、先達であり、私的にはよき親父であり、親しい兄貴であり、楽しい遊び仲間であった、土橋寛教授がついに今春三月末を以て停年退職されることになったのは、まことに感無量で、痛惜に耐えないところである。

土橋さんを奈良学芸大学からわが同志社にお迎えしたのは、一九六二（昭和三七）年四月であり、わが国文学専攻が創設されて八年目に当たり、大学院修士課程創設の年であった。したがって、土橋さんの同志社歴は、それまでの嘱託講師の時期を除いて、まさにわが大学院の歴史と相重なるものであり、わが大学院は土橋教授とともに生まれ、その強大な指導によって今日まで育成されたものであった。

それは勿論、大学院のみではなく、学部国文学専攻のその後の目覚ましい充実進展においても言わねばならぬことであった。

教室における土橋教授の指導は、該博にしてシャープな講義で、学生の蒙った学恩は計りがたく浩大であった。厳しい講義の中にそ

の人物による親しみ深さが溢れ、また教室外では全くの好々爺として、学生たちから万幅の信頼を浴びておられた。

周知のように、その研究分野は、学生時代からの中世の連歌・軍記物、近世の芭蕉の作品研究に始まって、古代歌謡から記紀万葉におよぶ広範なものであり、初期の研究成果は

「保元平治物語の一研究」（国語国文、一九三三・六一八）

「心敬の連歌論」（同右、一九三三・一一）

「連歌式目上より見たる僻連秘抄・連理秘抄・応安新式」（同右、一九三五・三）

一九三五・三）

「連歌形態論」（帯木、一九三五・一一）

「俊成の余情論」（帯木、一九三五・一一）

「連歌様式の発生とその本質」（国語国文、一九三七・四）

「四家式の華実論」（立命館文学、一九四八・二）

「芭蕉の近世性」（国語研究、一九五一・一）

『奥の細道・幻住庵記新釈』（白楊社、一九五四・四）

などに開花しているが、そのような連歌形態の精緻な研究に培われた学殖の上に、柳田国男の民謡研究、ジンメルの形式社会学・歴史哲学等によって開眼された澄徹した洞察眼が加味されて、

『民謡の社会性』（国語国文、一九五一・一二）

『民謡の形態とその社会性との関係』（1）（2）（国語国文、一九五二・一二、一九五三・一二）

『日本歌謡』（日本文学講座、東大出版、一九五四・一二）

『民謡と文学』（日本文学、一九五五・二）

『古代宮廷歌謡の性格』（解釈と鑑賞、一九五五・八）

『宮廷寿歌とその社会的背景』（文学、一九五六・六）

『記紀歌謡の諸問題』（古事記大成、第三卷、一九五七・四）

『古代歌謡集』（日本古典文学大系、一九五七・七）

『古代歌謡』（岩波講座、日本文学史古代三、一九五九・六）

『古代歌謡について』（文学・語学、一九五九・六）

などの、古代歌謡の研究へと進展し、それらのみごとくな結果として、

『古代歌謡論』（三書房、一九六〇・一一）

『古代歌謡と儀礼の研究』（岩波書店、一九六五・一二）

『古代歌謡の世界』（搞書房、一九六八・七）

など、われわれが現在なお大きな教示指針を蒙っている力作が公刊された。そして古代歌謡研究における第一人者としての土橋さんの

地位を牢固たるものにしたのであった。

土橋さんの古代歌謡研究における、歌謡の起源・構造・社会的機能・歴史社会の背景等についての明晰な解明に基づく豊かな知見は、さらに発揚されて、それらの明晰な「研究」と、歌謡の表現語彙の精確無比の「注釈」との総合としての「真の解釈」を樹立された。それは、

『古代歌謡全注釈』古事記篇（角川書店、一九七二・一）

『同』日本書紀篇（同、一九七六・八）

において顕示されているように、歌謡世界に関する明晰な体系的解明に基づく該博な知見を武器として、個々の歌謡表現の背後にある社会性を鋭く剔抉し、表現語彙の精確な注釈との関係において、明快な総合的論理が展開されているものであった。まさにそれは「解釈学」の規範が提示されているものと言うべきであろう。

これらの土橋さんの歌謡研究と歌謡解釈とは、古代歌謡研究の大道を開拓し精築したものであったが、さらに又、一方において、土橋さんの万葉集研究は、昨年の四月と五月とに出版された

『万葉開眼』（上・下、NHKブックス、一九七八・四、五）

において、万葉歌の生態・創作歌の性格・万葉歌人群の本態等の分析を通して、日本的抒情をめぐる万葉集の展開相を、深奥な知見をバックにしつつ、平明な叙述を以て解き明かし、万葉を国民一般に

親しみ易い国民的遺産とすることに成功された。そして、周知のうちに、この著によって、昨秋、毎日出版文化賞を受賞されたのだ。た。

私が強い感銘を受けたのは、受賞直後、土橋さんが私にもらされた感想の一端、

「外ならぬ万葉の研究で受賞したことが、一番うれしい。」

という言葉であった。この一言によって、われわれが古代歌謡研究の第一人者と目している土橋さんの胸奥にある研究の本質が、那邊にあるかを窺える思いであった。

次いで、「どうかますます若返って、今後ともよいお仕事を続けて下さい。」という私の慶びの言に、

「ハイ、これからも毎年賞を受けるつもりで頑張ります。」

と、実にさらりとお答えになった。それがまったくくだわりのない、天真爛漫の容子であったのが、何とも言いがたい、さわやかさを覚えさせた。

これこそが、土橋さんの人柄であり、本領であり、つねに若々しい物の考え方、みずみずしい研究意欲の源泉であろう。

だからこそ、つねに学生諸君の中に溶け込んで、永遠の青年ぶりを発揮されているのであった。

同志社国文学会々長としての土橋さん、われわれの誇るべき先達

土橋寛教授を送る

としての土橋さん、学生達にとって掛け替えない良師としての土橋さん、そして日常生活においては、われわれ同僚や学生のよき兄貴であった土橋さん、その土橋さんを、今や同志社から送り出さねばならぬ、悲しい時が迫ってきた。

わが国文専攻の上に、煌々たる光明を照らしつづけてきた巨大なる光源が、今や消え去ろうとする。この痛惜の情は筆舌に尽しがた

い。
今はただ、教授のご健康の弥栄と、さらなるご研究の進展とを、衷心よりお祈りするのみであるが、このような綿々たるわれわれの愛惜に対し、土橋さんはまた、さらりと、

「どこにいても、仕事はどんどんやりますよ」と言われるかも知れない。